

宮本誉士 提出 学位申請論文（課程博士）

『神道系御歌所歌人の基礎的研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は「神道系御歌所歌人の基礎的研究」と題して、神道・国学に関わりの深い明治期の「神道系御歌所歌人」の生涯と思想を中心に論じたものである。現状の国学研究においても、国学者が多くを占める明治期「御歌所歌人」の足跡を対象とする研究はほとんどなされておらず、和歌もしくは短歌の歴史を専門とする短歌史研究においても「御歌所歌人」研究の進展はほとんど見られない。近世はいうまでもなく、近代日本の「国学者」にとっても、和歌は身近なものであり、明治期の神祇行政に関わった国学者もその多くは歌人でもあった。

本論文でも取り上げられている福羽美静、八田知紀、本居豊穎らは御歌所にも関わるその代表的人物であり、また御歌所の基となる歌道御用を最初に仰せ付かった三條西季知も明治七年一月には神宮祭主を拝命し、神道教導職の大教正を兼ねた人物であった。

本論文は、主として明治前半期における神道・国学に関わりの深い歌人のうち、広い意味での「御歌所」に関係した歌人に焦点を絞り、その生涯と思想を検証して、彼らが明治期の「御歌所」において重要な役割を果たしたことを考察したものである。

本論文には、「Ⅰ 幕末薩摩の桂園派 — 御歌所歌人の一源流 —」に、「第一章 桂園派歌人八田知紀の尊皇思想と学問・歌論」、「第二章 国学者八田知紀と著作『神典疑問辨』の「天御中主神」論」、「第三章 御歌所長高崎正風の生涯と思想 — 幕末から明治へ —」の三章、「Ⅱ 御歌所歌人の諸相」には、「第四章 御歌所成立以前の宮中歌人 — 文学御用掛と福羽美静・近藤芳樹 —」、

「第五章 明治期御歌所の歌人群像」、「第六章 御歌所主事としての小出祭と阪正臣」、「第七章 御歌所寄人本居豊頼と御歌所長高崎正風」の四章、そして「Ⅲ 社会事業と御歌所歌人」には、「第八章 御歌所長高崎正風の教育勅語実践運動 —彰善會と一徳會—」、「第九章 村野山人と伏見桃山乃木神社の設立 —附論 阪谷芳郎と東京赤坂乃木神社の設立—」の二章、がそれぞれ配されており、各部各章において広義の「御歌所」に明治初期から関与した主要な神道系歌人の足跡と思想を通して、「御歌所」及びそれに関与した歌人たちの実態と歴史的意義が通観できる構成となっている。また、最後に終章「本論考の結論」が置かれ、本論文で考察した結論及び今後の検討課題が述べられている。

序章では、小泉菱三がその代表的著作である『近代短歌史 明治篇』（白楊社、昭和三十年）で述べた「近世期継承の和歌」を継承し、それをさらに宮中及び国内に展開させた主体は「御歌所」に関係した神道系歌人であることを明らかにすることが本論文の主目的であることが述べられている。次いで、「I

幕末薩摩の桂園派 ―御歌所歌人の一源流―」では、御歌所派すなわち桂園派歌人と称される場合の中心人物八田知紀・高崎正風を焦点に据え、彼らの生涯と思想が考察されている。まず「第一章 桂園派歌人八田知紀の尊皇思想と学問・歌論」は、薩摩藩において国学者としても活躍した桂園派歌人八田知紀の幕末期の足跡を主たる対象として、その著作『桃岡家訓』『大理論畧』などに見られる尊皇思想や学問観、「造化主」「造化神」重視の思想、そして歌論と神観の関わりなどを考察し、続く「第二章 国学者八田知紀と著作『神典疑問辨』の「天御中主神」論」は、明治期神祇官僚として活躍した田中頼庸・黒田清綱などに少なからず影響を与えた国学者八田知紀が、幕末期から明治初年にかけて「造化神」を重視し、さらには明治三年の『神典疑問辨』において「天御中主神」を重視した言説に着目して、それが歌論とも通じる八田の思想を形成していたことを中心に検証している。さらに「第三章 御歌所長高崎正風の生涯と思想 ―幕末から明治へ―」では、文字通り「御歌所」の主として明治

中期から大正期にかけて君臨した高崎正風が、嘉永二年の嘉永朋党事件に連座した父五郎衛門のゆえに島流しとなり、帰郷して八田知紀に歌を学んだ後、大久保利通などの導きによって薩摩藩・明治政府で活躍するまでの生涯と思想について人脈を辿りながら考察を加えたものである。

「Ⅱ 御歌所歌人の諸相」では、「御歌所」が、いかなる歌人によって構成されていたのかを考察し、併せて官制としての「御歌所」が成立する以前の「歌道御用掛」「文学御用掛」の活動と「御歌所」成立以降の歴史的変遷、すなわち、最も早く国学者として宮中和歌に関わった福羽美静をはじめ、「皇学御用掛」「文学御用掛」を務めた近藤芳樹、「主事」として活躍した小出粲・阪正臣、寄人本居豊穎、御歌所長高崎正風などの明治期「御歌所」における主たる歌人たちを対象として、その生涯の足跡を含めた宮中歌人としての活躍や「御歌所歌人」の職掌など、本論文の中核をなす論考が収められている。

「第四章 御歌所成立以前の宮中歌人 — 文学御用掛と福羽美静・近藤芳樹

―」は、幕末・明治期において活躍した国学者福羽美静と近藤芳樹が、明治期宮中歌人としての活動が考察されており、二人の活動が明治二十一年の「御歌所」設置に至る模索の時期であったことを述べ、併せてこれまで未紹介であった宮内庁書陵部所蔵『御歌所日記』を用いて近藤が『万葉集註疏』編纂に従事した実態を明らかにしている。

「第五章 明治期御歌所の歌人群像」は、明治二十一年に成立した官制としての「御歌所」の全体像を構成員の変遷や制度的変遷から俯瞰した考察であり、「御歌所」の組織と職掌から、「長」「主事」「寄人」「参候」などを務めた人々の「御歌所」における役割を検証し、「御歌所」官制や構成員の異動から、「御歌所」の組織的変遷を辿っている。

「第六章 御歌所主事としての小出粲と阪正臣」は、「文学御用掛」から宮中歌人を務めて明治三十三年四月「主事心得」を拝命した小出粲、「御歌掛」から宮中歌人を務めて明治三十九年四月「主事」を拝命した阪正臣を主題として、

その生涯と足跡から「御歌所歌人」の一端を考察している。また「御歌所」には「長」「主事」「寄人」「参候」「録事」があり、そのうち最も多くの人数を占めた「寄人」「参候」が原則として非常勤だったことを『御歌所日記』で確認し、常勤の「長」「主事」「録事」のうち「長」が休暇中は必然的に「主事」が「御歌所」を取り纏めたのであり、明治期の「御歌所」を理解する際においては、高崎正風のみならず小出粲・阪正臣などの「主事」を務めた歌人たちが重要な役割を果たしたことを明らかにしている

「第七章 御歌所寄人本居豊穎と御歌所長高崎正風」は、当時高崎正風と並び称された本居豊穎の生涯と和歌、さらには高崎正風の歌論と思想を主題として二人の「御歌所歌人」を考察したものであり、明治期における本居派と桂園派を代表する歌人本居豊穎と高崎正風が、明治期における近世期和歌の伝統を継承する歌人として中心的な存在であり、「御歌所」はその伝統を担う場でもあったことを述べている。

「Ⅲ 社会事業と御歌所歌人」では、「御歌所歌人」たちが関わった社会事業を対象として、これまでほとんど言及されることのなかった高崎正風を中心とする「御歌所歌人」が関わった教育勅語実践運動の足跡、及び「御歌所歌人」が関わった乃木神社設立をめぐる人々の動向が考察されている。

「第八章 御歌所長高崎正風の教育勅語実践運動 — 彰善會と一徳會—」は、高崎正風が中心となって創立した彰善會と一徳會の実態を考察し、両団体の活動内容と歴史的意義が考察されており、明治四十一年十一月に渙発された戊申詔書に基づく国民道徳論の盛行以前に教育勅語の実践を説いた彰善會・一徳會は、西村茂樹の日本弘道會とともに国民道徳普及の先駆けとなった運動であったことを述べている。

「第九章 村野山人と伏見桃山乃木神社の設立—附論 阪谷芳郎と東京赤坂乃木神社の設立—」では、御歌所歌人とも関わりのある神戸の実業家村野山人が中心となった伏見桃山乃木神社の設立過程を中心に、附論として阪谷芳郎と

東京赤坂乃木神社の設立過程をも取り上げて、乃木神社の建設に関わった人々の動向を考察したものであり、大正元年十月三日國學院大學講堂で開催された「乃木大将追悼会」において、「乃木神社創立の決議」が為されたこと、同追悼会には、國學院関係者をはじめとして千葉胤明、池辺義象など「御歌所」関係者が乃木神社創建に関わったことを明らかにしている。終章「本論考の結論」では、各章の概要や各考察の結論及び今後の検討課題である「旧派歌人」のネットワークや「御歌所」に関与した黒川真頼、小杉楹邨など明治期を代表する考証派国学者の「御歌所」との関係の個別的考察の必要性などが述べられている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文「神道系御歌所歌人の基礎的研究」は、明治期における神道に関わり

の深い「御歌所」系歌人の生涯と思想を中心に論じたものである。いわゆる「御歌所歌人」とは、明治期に勃興した与謝野鉄幹、正岡子規など短歌革新運動に関わる「新派和歌」を担った「新派歌人」に対して、「旧派和歌」と呼称された「旧派歌人」のなかで宮内省御歌所に関わった高崎正風を代表とする歌人を総称する語彙として用いられており、多くは「御歌所」の官制が成立して、その長に立った高崎に繋がる「桂園派」を指している。

本論文は、そうした「御歌所」系歌人は官制としての「御歌所」以降に形成されたものではなく、またそれは小泉蓼三が『近代短歌史 明治篇』（昭和三十年、白楊社）で夙に指摘しているように一概に「旧派」イコール「桂園派」と括れるものでもなく、「御歌所」系歌人の形成過程には八田知紀や福羽美静、近藤芳樹、阪正臣などの神道に關係する国学者が重要な役割を果たしていること、そして明治初期から中期にかけて宮中の歌会始や天皇・皇后の国典・道徳などに関する指南的地位にあった福羽美静らの活動を高崎正風が継承すること

によって「御歌所」官制と「御歌所」系歌人が成立したことを、宮内庁書陵部所蔵の『御歌所日記』など貴重な資料を含む多くの関係資料を駆使して丹念に考察したものである。

本論文が考察の対象としている「御歌所」の研究に関しては、当該研究の唯一にして最高の業績ともいべき恒川平一の『御歌所の研究』（昭和十四年、還暦記念出版会）があり、また明治期の「旧派」から「新派」への短歌史については前記小泉蓼三『近代短歌史 明治篇』が最も詳細を極めているが、本論文はこうした先行業績が扱っていなかった明治初年以來の「御歌所」系歌人と目される国学者の神道と和歌との関係を、その生涯と思想を中核として考察したものであり、従前の「明治国学」研究にはなかった研究視座である。

すなわち、これまでの「明治国学」研究においては、国学者が多くを占める明治期の「御歌所歌人」を対象とする研究はほとんどなかったと言っても過言ではない。本論文が考察の対象とする「御歌所」系歌人の足跡を明らかにする

ことは、明治期の宮中和歌における国学者の活動と役割を明らかにする意味で明治国学研究に新たな視点を齎すものと思われる。

また、従来の近代短歌史研究においても、「御歌所」に関しては、いわゆる短歌革新運動の視点から叙述したものが多くを占めており、和歌の伝統継承という視点から考察する研究は稀であり、堂上歌人とともに「近世期継承の和歌」（小泉菱三『近代短歌史 明治篇』）を担う「神道系御歌所歌人」を対象とする本論文は、近代の短歌史を研究する上でも重要な業績となろう。

さらに、本論文は、これまでの「御歌所」に言及する大半の研究が、御歌所派⇨桂園派と捉えて「御歌所」における桂園派の影響力を強調していることに疑問を呈し、八田知紀・高崎正風は単なる桂園派歌人ではなく、神道的思想・生き方に根ざした「神道系歌人」であったことを緻密に論証している点も評価できよう。また、八田知紀、高崎正風の和歌と神道を結ぶ要に位置する人物として福羽美静の存在が極めて重要であったことを指摘し、福羽のもとで宮中の

古典学者・歌人として活躍した近藤芳樹、小出祭、阪正臣などの存在が「御歌所」形成に重要な役割を果たしたことを考察しているが、これも従来には見られなかった研究視点として評価されよう。

ただし、阪正臣の「思想」に関しての考察は未だ不十分であり、神道系歌人・国学者としての阪正臣を論じるならば、まずは平田派国学者としての素地を最低でも『祝詞宇比麻那毘』などによって検討し、その「神道系歌人」の思想を考察すべきであろう。また、小出祭にしても、彼を本当に「神道系歌人」と称することができるとどうか、その師とされる瀬戸久敬との関係をも含めての考察が必要であろう。さらに、本居豊穎に関しても、鈴木淳「本居豊穎伝」（『維新前後に於ける国学の諸問題』、昭和五十八年、國學院大學日本文化研究所）などを参照し、本居豊穎の和歌について詳細な考察が加えられており、この点も従来にはなかった精緻な「御歌所」系歌人としての国学者研究と評価できる。だが、ここでも本居豊穎は自明の「神道系歌人」として扱われており、何ゆえ

に「神道」なのかについての踏み込んだ考察はなされていない憾みが依然として残る。しかしながら、明治期の「旧派歌人」を代表する本居豊穎と高崎正風を比較することによって、「御歌所」が決して「桂園派」のみの「占有物」ではなかったことを改めて明らかにし、「旧派」の存在が単に「新派」への移行を意味する「前史」の役割を果たしたに過ぎないと見る論考に対して再考を促すものとなっていることは確かであろう。

このように、本論文は「明治国学」研究に新たな視点を提供するのみならず、近代の短歌史研究にも重要な示唆を与えるものと評価できる。また、福羽美静や高崎正風の生涯と思想を分析することによって、「御歌所」系歌人には「風教」に裨益する社会的活動を積極的に行う意識が根底にあったことを明らかにした点も本論文の大きな成果と言えよう。

無論、前記したように、八田知紀、福羽美静はともかくとしても、「御歌所」系歌人と神道との関係についての分析に不十分な点があることは事実であり、

また、近世歌壇と明治歌壇との連続性と非連続性との問題、歌会始が宮中内部から国家的行事になるに際しての歌人と国民国家形成との関係、あるいは薩摩藩における和歌と神道・国学との関係、など本論文では十分には考察されていない課題が数多く残されている。さらに、関連する人物名の誤記やそれらの人物の略伝の典拠等にも不十分な点が散見される。しかしながら、これらの課題や欠点は、論者の今後のさらなる研究の進展によって十分に克服されるものと思慮される。

以上述べたように、本論文は、「御歌所」に拠る主要な神道系歌人・国学者の生涯と思想を考察し、併せて官制としての「御歌所」の成立と展開の一斑をも明らかにしようとする意欲作であり、「明治国学」研究の新分野を開拓し、近代日本における短歌史に占める神道系歌人・国学者の歴史的位付けと役割を解明する基礎的研究として高く評価できる。よって、本論文の提出者宮本誉士は、博士（神道学）の学位を授与されるべき資格があるものと認める。

平成二十二年二月十八日

|    |         |    |    |   |
|----|---------|----|----|---|
| 主查 | 國學院大學教授 | 阪本 | 是丸 | 印 |
| 副查 | 國學院大學教授 | 大原 | 康男 | 印 |
| 副查 | 國學院大學教授 | 武田 | 秀章 | 印 |